

令和 4 年 5 月 23 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K13845

研究課題名(和文)脆弱性の社会的機能の受容プロセス ミックスド・メソッド・アプローチによる日仏比較

研究課題名(英文)Acceptance process of social functions of vulnerability

研究代表者

樋口 麻里(HIGUCHI, Mari)

北海道大学・文学研究院・准教授

研究者番号：80755851

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：労働が困難なほどの心身の脆弱性をもつ人々は、社会的入院や貧困、必要なケアが十分に受けられないといった状況に陥りやすく、これらの人々が社会的排除に遭うリスクは相対的に高い。

本研究では、そうした人々の事例として、精神障がいをもつ人々(以下、精神障がい者)に焦点を当て、精神障がい者のもつ脆弱性が、かれらと周囲の人々との関係に与える影響について、フランスの当事者グループにおける参与観察とインタビューによる質的調査、そして日本およびフランスの一般市民を対象にした量的調査から検討した。また、質的データの効率的な分析、ならびに質的データの分析方法の教育におけるQDAソフトウェアの利用方法を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、脆弱性が精神障がい者とその周囲の人々との関係に与える影響について、精神障がい者という具体的対象に対する社会意識や、周囲の人々との相互作用行為から実証的に検証を行った。それによって、脆弱性に触れる経験と社会規範との関連性や、精神障がい者に対する肯定的な社会意識の要因、精神障がい者が他者と対等に意見を尊重される場面設定に必要な条件等に関する仮説を提示した。これらの仮説は、心身の脆弱性をもつ人の社会的排除のリスクの低減につながるものと言える。

研究成果の概要(英文)：People with physical and mental vulnerabilities that make it difficult to work are more likely to have long-term hospitalization, poverty, and inadequate access to necessary care, and these individuals are at relatively high risk of social exclusion.

This study focuses on people with mental illness as examples of such people. The author examined the impact of their vulnerability on their relationships with the people around them through a qualitative study based on participant observation and interviews with people with mental illness in France, and a quantitative survey of the social attitudes toward these people in Japan and France.

研究分野：社会学、福祉社会学

キーワード：ケア 脆弱性 社会的排除 社会学 社会意識 フランス 日本

1. 研究開始当初の背景

労働が困難なほどの精神的あるいは身体的な脆弱性をもつ人々は、医療保険や社会保障制度が整備された福祉国家においても、社会的入院や貧困、ホームレスとなることで必要なケアが十分に受けられないといった状況に陥りやすく、これらの人々が社会的排除に遭うリスクは相対的に高い。その背景には、精神的あるいは身体的な脆弱性が依存の発生源であり (Kittay 1999 = 2010)、労働の阻害要因として一元的に捉えられていることが影響していると考えられる。

そこで本研究では、とくに精神的な脆弱性をもつ精神障がいのある人々(以下、精神障がい者とする)に焦点を当てる。精神障がい者のもつ脆弱性について、かれらと周囲の人々がどのように捉えているのか、またその捉え方が精神障がい者と周囲の人々の社会関係に与える影響について、かれらと密接に関わる家族と医療従事者、そして社会一般の人々それぞれのレベルについて検討する。また、精神障がい者の入院期間が世界的に短く (OECD 2019)、精神医療福祉領域における非営利組織 (アソシアシオン) の活動が盛んなフランスを主な調査対象として、日本との比較を行う。

2. 研究の目的

精神障がい者のもつ脆弱性に対する捉え方と、その捉え方が家族や医療従事者といった身近な他者・支援者との関係性、そして社会意識に及ぼす影響を明らかにする。

3. 研究の方法

フランスにおける精神障がい者当事者団体によるアソシアシオンが主催する、精神障がい者・家族・医療従事者の三者間のトリアローグと呼ばれる対話活動について、参与観察と活動メンバーへのインタビューによる調査を行った。調査では、精神障がい者のもつ脆弱性に対する、家族と医療従事者の捉え方、またその捉え方が対話活動における三者間の関係性に与える影響、対話活動における三者間の関係性の調整のされ方を中心に分析した。また、このアソシアシオンのメンバーである精神障がい者の主な診断名は、統合失調症あるいは双極性障害であった。

日本とフランスの調査会社の登録モニターを対象として、web 調査による質問紙調査を実施した。調査に先立って、全国調査 SSP2015 のデータを用いて、病気や障がいのある人、子ども、高齢者といった脆弱性をもつ人々に、職業としてケアを提供するケア職に特徴的な規範意識について分析した。その結果を踏まえて、web 調査の職業項目を設計し、「健康と社会福祉に関する意識調査」を実施した。同調査では、調査委託会社の「NTT コム オンライン・マーケティング・ソリューションズ株式会社」の登録モニター、およびフランスの提携調査会社の登録モニターを対象に、2020年5月21日～2020年5月27日にかけて実施した。モニターは、日本・フランスともに全国在住の20～69歳の男女で、20～60代の各年齢層につき、200名(男性100名、女性100名)の回収を割り当て、割り当て数に達した時点で調査を終了した。最終回収数は、日本が1164名、フランスが1191名となった。なお、日本調査については、南山大学社会倫理研究所の森山花鈴氏・辻本耐氏との共同調査として行った。web 調査では、精神障がい者の社会的受容に関する意識に影響を与える要因について、ケア職の効果と、自由回答項目の記述内容から検討した。また、分析結果を日仏間で比較して、それぞれの国の特徴を考察した。

本研究では、質的データの分析過程における QDA ソフトウェアの利用方法と、質的調査の教育における QDA ソフトウェアの活用についても検討した。

4. 研究成果

トリアログは当該アソシアシオンの種々ある活動の一つとして開催されており、その内容は、あらかじめ参加メンバーで決めたテーマについて、精神障がい者・家族・医療従事者の三者間で自由に意見交換を行うというものであった。トリアログでは、精神科医療や地域生活において、三者それぞれが日々感じていることを率直に話して、互いに新たな視点を得ることが、参加者間での共通の目標となっていた。病院や家族との日常生活においては、二者間あるいは三者間の権力関係から、互いに伝えにくいことがある。それに対してトリアログでは、いずれの立場の人も、自分と異なる立場の人の意見を尊重しており、安心して各自が自由に意見を述べられるという場面が観察された。

他方で、対話において、精神障がい者と医療従事者間、あるいは精神障がい者と家族の間で意見が対立し、三者間で意見を尊重するという均衡関係が崩れる場面が時折観察された。そうした場面では、医療従事者や家族はそれぞれ、自分たちは精神障がい者の精神的な脆弱性を配慮して行動していると考えていたのに対して、精神障がい者は配慮と解釈しておらず、むしろ精神障がい者の意思を尊重しないことへの不満が示されていた。このように、三者間で互いの意見を尊重するという関係性は、常に強固に維持されてはいなかった。三者間の均衡した関係性を維持、あるいは回復させるために、対話中にはいくつかルールが設定されていたが、それらに加えて、対話活動の設計時点においても工夫が必要であることが明らかになった。また、そうした工夫がない状況では、脆弱性を配慮すべきものと捉える医療従事者や家族の認識に基づく行動が、精神障がい者の意思や希望を超えて優先される可能性が示唆された。

SSP2015 の分析からは、ケア職の女性が、ジェンダー規範に関して他の職業の女性とは異なる意識をもつことを明らかにした。この結果から、ケア職に従事する人は、他の職業に従事する人と比べて、異なる規範意識をもつ可能性が示唆された。そこで、日本とフランスの web 調査データを用いて、精神障がい者が地域社会で生活することに対する意識 (社会的受容) について、ケア職の影響が見られるかを検証したところ、有意な関連性は見られなかった。その原因として、本調査でのケア職のケース数が少なかったことが考えられた。今後の課題として、調査設計時にケア職についても一定以上ケース数を割り当てる必要性が明らかになった。

また、フランスの方が日本よりも、精神障がい者に対する社会的受容が高い傾向にあるものの、精神障がい者の受容に否定的な理由は、日仏間で似通っている傾向が示唆された。

質的データの分析方法の教育において、分析過程を学生間、学生 - 教員間で共有することは、学生がどのような点に悩んでいるのかを、教員が的確に把握することにつながる。そこで、分析過程の可視化と共有を可能にするツールとして、QDA ソフトウェアの活用を提案した。また、このような教育を行うには、教員があらかじめ QDA ソフトウェアの機能と分析法との対応を把握しておく必要がある。本研究では、QDA ソフトウェアのうち MAXQDA12 の機能の特徴を、Atlas.ti7 と NVivo11 の機能との比較から検討した。

結果、MAXQDA12 のコーディング機能は、帰納的分析を徹底しやすい Atlas.ti7 と、データ分類を主眼とする NVivo11 の中間に位置するソフトウェアであり、抽象度の低いコードをある程度細かくデータに割り当てる方法にも、抽象度の高いコードでデータを大まかに分類する方

法にも利用できることが分かった。また、これらの特徴から、MAXQDA12 は演繹的な分析にも寛容な漸次構造化法や KJ 法に適合的であることを示した。

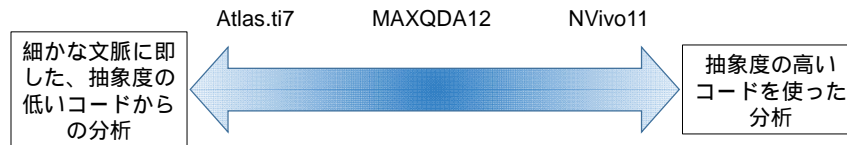


図 1 各 QDA ソフトウェアが想定する分析方法 (樋口 2018 より引用。)

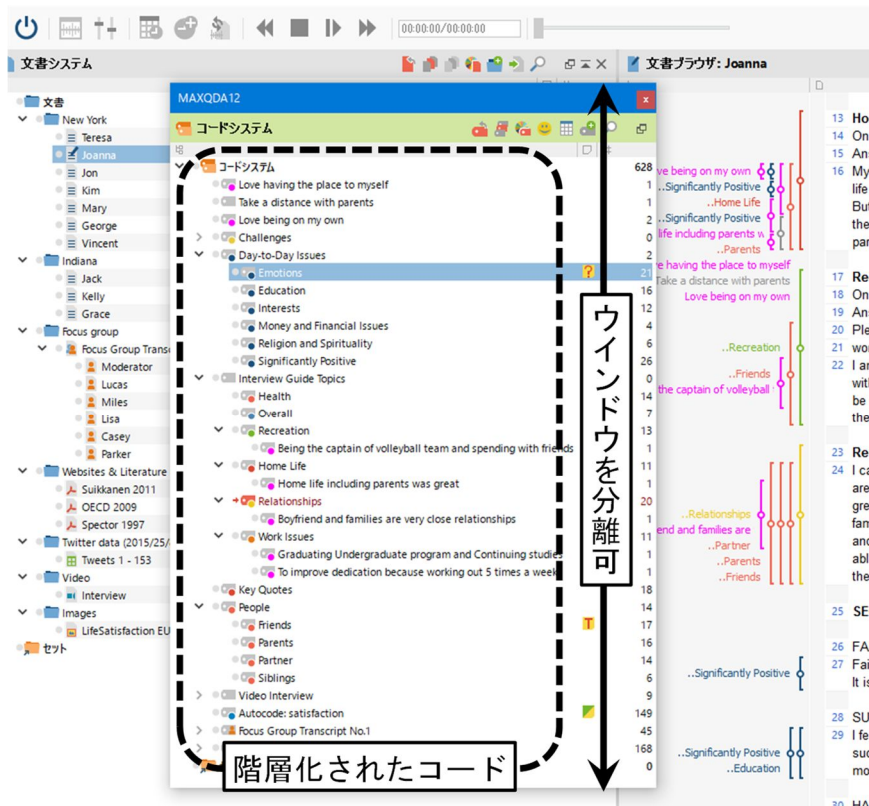


図 2 MAXQDA12 におけるコードシステムウィンドウの分離表示 (樋口 2018 より引用。)

[参考文献]

Kittay, Eva Feder. 1999. *Love's Labor: Essays on Women, Equality, and Dependency*. New York, London: Routledge. (岡野八代・牟田和恵監訳, 2010, 『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』白澤社。)

OECD. 2019. "Health Care Utilisation: Hospital Average Length of Stay by Diagnostic Categories." OECD.Stat. Retrieved (<https://stats.oecd.org/index.aspx?queryid=30165>).

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 樋口麻里	4. 巻 160
2. 論文標題 二重負担を受容する有配偶女性の意識の規定要因 ――全国調査SSP2015 を用いた資源の影響の検証	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道大学文学研究院紀要	6. 最初と最後の頁 97-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/bfhhs.160.197	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 樋口麻里	4. 巻 39
2. 論文標題 質的調査法の教育におけるQDA ソフトウェア利用 MAXQDA12 を事例として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 年報人間科学	6. 最初と最後の頁 29-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/67879	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 樋口麻里
2. 発表標題 何が精神障がい者に対する寛容な社会意識を高めるのか 国際比較研究からみる日本の特徴
3. 学会等名 第45回日本自殺予防学会総会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 樋口麻里・夏苺郁子・辻本耐
2. 発表標題 精神科医の診察態度に対する当事者・家族の思いと性別による特徴 自由回答項目の計量テキスト分析から
3. 学会等名 第47回日本保健医療社会学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Mari Higuchi
2. 発表標題 The Influence of Knowledge on the Social Acceptance of People with Schizophrenia: Characteristics of a Society with a History of Psychiatric Institutionalization
3. 学会等名 International Comparison and Collaboration in Medical Sociology: Research Initiatives, Challenges, and Future Prospects (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mari HIGUCHI
2. 発表標題 Rethinking Community Support for People with Mental Health Problems: An Introduction to the Practice of “Triologue” in France
3. 学会等名 19th ISA World Congress of Sociology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 辻本耐・森山花鈴・樋口麻里
2. 発表標題 自殺に対するスティグマとリテラシーとの関連
3. 学会等名 日本健康心理学会第33回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Carola Hommerich, Naoki Sudo and Toru Kikkawa eds., (Mari Higuchi)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 186
3. 書名 Social Change in Japan, 1989-2019: Social Status, Social Consciousness, Attitudes and Values	

1. 著者名 友枝敏雄・樋口耕一・平野孝典編、(樋口麻里)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 344
3. 書名 いまを生きるための社会学(いまを生きるためのシリーズ)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	森山 花鈴 (MORIYAMA KARIN) (40635702)	南山大学・法学部・准教授 (33917)	
研究協力者	辻本 耐 (TSUJIMOTO TAI)	南山大学・社会倫理研究所・研究員 (33917)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------